

『三国志演義』中の三国時代の詩文について（一）—曹操「短歌行」

Chinese poetry and sentences of Three Kingdoms period in the *Sanguozhi yanyi* (1)

—Cao Cao's *Duangexing*

武井 満幹

Kazuhiro TAKEI

要 旨

『三国志演義』中に挿入される三国時代の詩文について、『三国志演義』のテキスト間の異同や『三国志演義』と総集や別集などに採録されているものとの異同を調査した。そのことによって『三国志演義』の中の三国時代の詩文と総集や別集などに採録されているものがどれほど違うのか同じなのか、またどれが一番近いテキストであるのかを明らかにできればと思う。本稿では曹操「短歌行」を取り上げる。

<キーワード>: 三国志演義、曹操、短歌行、建安文学、文選

一. はじめに

『三国志演義』（三国演義）の中には、文言の詩文が様々な形で挿入されている。よく見られるのは、ある出来事が起こった前後に「後世の人が次のような詩（あるいは賛）を作って讃えている」などとして挿入されるものである^[注1]。これは作者名は書かれない。また中には実在の詩人の詩が挿入されることもある。例えば第四十八回には、杜牧の「赤壁」

折戟沈沙鉄未消　折戟　沙に沈みて　鉄未だ消えず
自將磨洗認前朝　自ら磨洗を將て　前朝と認む
東風不与周郎便　東風　周郎の与に便せずんば
銅雀春深鎖二喬　銅雀　春深し　二喬を鎖さん

が挿入されている。

このような詩の挿入は、恐らくは他の小説にもみられるものだと思うのだが、『三国志演義』にはこれらのほかに、作中で活躍をする登場人物が三国の時代に作った作品が挿入されることがある。たとえば曹操「短歌行」、諸葛亮「出師の表」などである。これらは作品の一部ではなく、全文が挿入されており、物語の展開に巧みに取り込まれているものもある。

筆者は『三国志演義』はもちろん白話小説にも詳しくないが、学部のゼミや大学院の講

義で『三国志演義』を取り上げるうちに、そこに挿入される文言の詩文、とくに三国時代の詩文に興味を持つようになった。

明代に『三国志通俗演義』として集大成されるまでの、どの時点で取り込まれたのであろうか。また何かに基づいたのであろうか、そうだとすればそれは何であろうか。取り込まれて以降変わらないのか、それとも長い変遷のうちに字句が変わったり脱落したりすることがあったのだろうか。いや、そもそも何にも基づいていない可能性もあるのではないだろうか。

このようなことは、小説の研究においてどれほどの意味を持つのかはわからないが、テキストを知るといふ点や古代の詩文がどのように後世伝えられているかという点においては、全く無意味とはいえないのではないかと思ひ、『三国志演義』のテキスト間の異同、『三国志演義』と総集や別集数種のテキストとの異同を調べてみた。三国時代の詩文が何からとられたのか、その特定は難しいまでも総集や別集に採録されているものとどれほど違うのか、また何が一番近いのかを明らかにできればと思う。本稿はその報告の一部である。

二、『三国志演義』中の三国詩文

『三国志演義』中の三国時代の詩文を取り出すと次の表ようになる。

作者	作品	『演義』	『三国志』	『文選』
陳琳	為袁紹檄劉豫州	第22回 嘉×・李×・毛○	×	卷44
孔融	薦禰衡表	第23回 嘉×・李×・毛○	袁紹伝裴注	卷37
曹植	銅雀台賦	第44回 嘉○・李○・毛○	陳思王伝裴注	×
曹操	短歌行	第48回 嘉○・李○・毛○	×	卷27
曹植	七歩詩	第79回 嘉○・李○・毛○	×	×
諸葛亮	出師表	第91回 嘉○・李○・毛○	諸葛亮伝	卷37
諸葛亮	後出師表	第97回 嘉○・李○・毛○	諸葛亮伝裴注	×

作品名は、作中に作品名が述べられているものについてはそれを、『文選』所収ものについては『文選』での名を、それ以外は広く一般的に知られていると思われる名を記した。なお『三国志演義』の中で作品名が書かれるのは第四十四回の「銅雀台賦」と第九十一回の「出師表」のみである。

『演義』の欄には、『三国志演義』のテキストから三種——嘉靖本^{〔註2〕}、李卓吾本、毛宗崗本(そ

れぞれ嘉、李、毛と略す) —について挿入があれば○で、なければ×で示した。回数は毛宗崗本での回数である。

『三国志』欄には、『三国志』本文および裴松之注の引用箇所を記し、引用されてない場合は×を記した。なお三番目の「銅雀台賦」はそのもととなった賦の所在である。

三国の詩文ということで三国時代の詩文を多く収める『文選』も見てみた。この欄には、胡刻本での巻数を示し、収められていない場合は×を記した。

『三国志演義』は歴史書の『三国志』(裴松之注を含む)との関連が大きいので、これらの作品の出所も『三国志』ではないかとまずは見当を付けることができるが、表からわかるように、陳琳「為袁紹檄劉豫州」、曹操「短歌行」、曹植「七步詩」は『三国志』には記載されない。ただ陳琳の檄文は『三国志』にはないけれど『後漢書』袁紹伝には引かれている。

『演義』欄からわかるように、陳琳「為袁紹檄劉豫州」と孔融「薦禰衡表」は、嘉靖本と李卓吾本にはなく、毛宗崗本から挿入されている。このことについては、毛宗崗自身が、毛宗崗本の編集の方針を述べたと言うべき「凡例」の中で次のように述べている。

三国文字之佳、其録于文選中者、如孔融薦禰衡表、陳琳討曹操檄、実可与前後出師表並伝、俗本皆闕而不載。今悉依古本増入、以備好古者之覽觀焉。

三国時代の文ですばらしいもので、『文選』中に収録されているもの、孔融の禰衡を推薦する上表文、陳琳の曹操を討伐する檄文のような文は、まことに「前後出師の表」とならび伝えられるべきであるが、俗本はどれも欠いていて載せない。いまずべて古本によって追加し、それで好古の者の観覧に備えた^{〔註3〕}。

もともとの『三国志演義』には無かったのを毛宗崗が加えたとある。ここで『文選』に言及されているのは興味深い。

「古本」「俗本」については、金文京氏が「毛本冒頭の凡例を見ると、〈中略〉ここにいう俗本とは毛本以前のすべてのテキストのことであり、また古本というのは、毛宗崗がこうであらねばならないと考えたテキストのことで、実際にそういうものが存在するわけではない。つまり彼は、自分が理想とする、しかし現実には存在しないテキストを古本としてでっち上げ、それによって現実に存在するテキストを俗本として批判し、改訂を加えたのであつ

た。これは当時の小説改訂者の常套手段と言ってよい。」と述べておられるのや^{〔註4〕}、また小川環樹氏が「このような改訂は、すべて「古本」によったと称するが、新しい改訂本を古本とよぶのは明以来、戯曲や小説の批評家の常習の手段であった。近くは金聖嘆が『西廂記』や『水滸伝』において行ったところでもある。」と述べておられる^{〔註5〕}のに従って理解しておく。

ところで「俗本」については、中川諭氏が「〈前略〉その他、寶翰楼本のように所在がわからず検討のできないものもあるし、現存しない『李卓吾先生批評三国志』が存在していた可能性も否定できないので、呉観明本がすなわち毛宗崗本「凡例」に言う「俗本」であるとにわかに断定はできない。しかし毛宗崗本「凡例」と照合する限り、その可能性は大きいといえよう。もし呉観明本そのものでなかったとしても、「俗本」は呉観明本とほぼ同様の体裁・内容を持った版本に違いあるまい。」と述べられ^{〔註6〕}、「俗本」が李卓吾本の呉観明本か、それと同様の体裁の版本である可能性を指摘される。

当初は、単純に、現在多く流布している毛宗崗本と羅貫中『三国志通俗演義』に一番近く現在遡れる最古のテキストである嘉靖本の二つだけを調査の対象としていたが、中川氏の指摘を知って、もう一種李卓吾本を加えることにした。

それでは次から具体的に作品をあげて字句の異同を確認していこうと思う。なお前掲の表の順（『演義』の回の順）に確認していくのが筋かと思われるが、紙幅の都合もあり順不同で確認していくこととし、本稿では曹操「短歌行」を取り上げる。

三. 各作品の検討

1. 曹操「短歌行」

『三国志演義』第四十八回「宴長江曹操賦詩 鎖戦船北軍用武」に引用されている。作中では「短歌行」とは言っていない。作品名を言う必要が無いのかも知れないし、「短歌行」とよく似た別の作品という設定であるのかもしれない。『演義』ではこの場面で作ったことになっているが、実際の「短歌行」の制作時期は不明である。

底本と校勘に用いた資料は以下の通り。なお校勘に用いた資料は、後掲の校勘記では【 】で示す略称を用いることとする。

- ・底本一『三国志演義（酔耕堂本四大奇書）』（羅貫中著／毛綸・毛宗崗評、中華書局〔中華版中国古典宝庫〕、1995年）

- ・校勘一 『三国志通俗演義』卷十「曹孟德横槊賦詩」(『古本小説集成』所取、上海古籍出版社、1994年)【嘉靖本】
- 『李卓吾先生批評三国志』第四十八回「曹孟德横槊賦詩」(徳田武編、ゆまに書房 [対訳・中国歴史小説選集]、1984年)【李卓吾本】
- 『文選』卷二十七(芸文印書館、1991年12版)【文選胡刻本】
- 『文選』卷二十七(『六臣注文選』中華書局、1987年)【文選四部本】
- 『文選』卷二十七(『日本足利学校蔵宋刊明州本六臣注文選』人民文学出版社、2008年)【文選足利本】
- 『宋書』樂志(中華書局、1974年)【樂志】
- 『樂府詩集』卷三十相和歌辞「短歌行(晋樂所奏)」(中華書局 [中国古典文学基本叢書]、1979年)【樂府一】
- 『樂府詩集』卷三十相和歌辞「短歌行(本辞)」(中華書局 [中国古典文学基本叢書]、1979年)【樂府二】
- 『漢魏六朝百三名家集』所取『魏武帝集』(江蘇古籍出版社、2002年)【百三家集】

《原文》

对酒当歌、人生幾何。譬若朝露、去日無多。慨当以慷、憂思難忘。何以解憂、惟有杜康。
青青子衿、悠悠我心。呦呦鹿鳴、食野之萍。我有嘉賓、鼓瑟吹笙。皎皎如月、何時可輟。
憂從中來、不可断絶。越陌度阡、枉用相存。契闊談讌、心念旧恩。月明星稀、烏鵲南飛。
繞樹三匝、無枝可依。山不厭高、水不厭深。周公吐哺、天下歸心。

《校勘》

- 1 「若」、嘉靖本・文選胡刻本・文選四部本・文選足利本・樂志・樂府一・樂府二・百三家集作「如」。
- 2 「無」、嘉靖本・文選胡刻本・文選四部本・文選足利本・樂志・樂府一・樂府二・百三家集作「苦」。
- 3 「何以」、樂府一作「以何」。
- 4 「憂」、樂志・樂府一作「愁」。
- 5 「惟」、文選胡刻本・文選四部本・文選足利本・樂志・樂府一・樂府二・百三家集作「唯」。
- 6 「衿」、嘉靖本作「襟」。
- 7 「悠悠我心」之下、文選胡刻本・文選四部本・文選足利本・樂志・樂府一・百三家集有「但為君故、沈吟至今」二句。文選四部本・文選足利本注云、善本無此二句。『胡氏考異』云、

袁本、茶陵本有校語云善無此二句。案、所見非也。此詩四句一換韻、「今」与「心」協、不容善独無之。蓋亦脱正文共注一節。説具於前。尤延之知其誤、拋五臣補正文。故此処有添改痕跡。但疑終失注耳。

- 8 「呦呦鹿鳴」以下四句、樂志、樂府一、在「不可断絶」之後。
- 9 「萍」、文選胡刻本・文選四部本・文選足利本・樂志・樂府一・樂府二・百三家集作「苹」。
- 10 「皎皎」、嘉靖本作「皎明」、文選胡刻本・文選四部本・文選足利本・樂志・樂府一・樂府二・百三家集作「明明」。
- 11 「輟」、文選胡刻本・文選四部本・文選足利本・樂志・百三家集作「掇」^[注7]。
- 12 「越陌度阡」以下八句、樂志、樂府一無。
- 13 「稀」、文選四部本・文選足利本作「希」。
- 14 「繞」、嘉靖本・李卓吾本作「遶」。
- 15 「匝」、文選四部本・文選足利本「帀」。
- 16 「無」、嘉靖本・文選胡刻本・文選四部本・文選足利本・樂府二・百三家集作「何」。
- 17 「水」、文選胡刻本・文選四部本・文選足利本・樂府二作「海」。
- 18 「哺」、嘉靖本作「捕」。

ぴたりと一致するものはなくどこかしらに異同があり、また『三国志演義』間にも異同がある。

字の異同については、大部分が異体字または同意語と判断できるが、2「無」、10「皎皎」、11「輟」、16「無」、17「水」、18「哺」における異同は大きな違いと言える。とはいえ18「哺」の異同を除けばどうにか諸本に作る字で解釈した場合と同じ方向で解釈することはできそうである。2「無」の異同については、諸本が「苦」に作り一句を過ぎ去った日々がきわめて多いと解釈するのに対して、「無」では一見過ぎ去った日々が多くないということになってしまう。だが「無」を反語とし「去日 多きこと無からんや」と読めば、過ぎ去った日々が多いという意味でとらえることができる。10「皎皎」も諸本が作る「明明」もともに光かがやくさまを表すので、その意味では同じと言える。嘉靖本の「皎明」は他に例が見当たらない語である。11「輟」の異同については、諸本が作る「掇」は取る、拾うという意味であるので、一句が良き人がいつ得られるのかという意味となる。「輟」はやめる、止めるという意味であり、良き人を探すことをやめると考えるとどうであろうか。良き人が得られれば人材探しが終わるけれど、良き人が得られなければ人材探しは続くこととなる。

そう考えると人材を探すことがやまないということで、良き人が手に入れないことを言ったと解釈できるかと思う^(注8)。16「無」における異同であるが、「無」だと枝が無いことを断定することになるが、諸本が作る「何」なら言外に無いことを表す一方で逡巡ととらえることもできるかと思う。17「水」については出典から言えば「海」のほうが良いと思われるが^(注9)「水」から海を連想することは可能であろう。

一応の訳を示すと、次の通りとなる^(注10)。

酒を前にしては大いにうたうべき、人の命はどのくらいか。

たとえば朝露のようなもの、過ぎ去った日々が多くないなどということはない。

心を高ぶらせ歌うべき、憂いはなかなか忘れられない

どうやってこの憂いを払おう、(それには) 杜康があるだけだ

青青としたあなたの衿、いつまでも (あなたを慕う) 私の心

ユーユーと (なごやかに) 鹿は鳴き、仲良く野のよもぎを食む

私によき客人がいれば、瑟をひき笙を吹いてもてなそう

(良き人は) 明るく輝く月のようだ、いったいいつ (良き人を集めることを) やめられるだろうか。

(やめられない) 憂いが心から湧いてきて、断ち切ることができない

はらかな道のりをこえて、ぜひとも私に会いに来ておくれ

苦勞して宴の用意をして語り合い、昔のよしみを思い合いたい

月が明るく星がまばらになり、烏鵲が南に飛んでいく

木の周りを何度も飛び回るが、身を寄せる枝がない。

山はいとうことなく高さを増し、海はいとうことなく深さをましていく

周公は食べかけをはき出して面会し、(それで) 天下の人々は周公に心を寄せたのだ

詩句のレベルでは、「楽府一」と略称した『楽府詩集』「晋楽所奏」と他との違いが特に顕著である。句数が大きく異なるし、前後する句がある^(注11)。もう一点「但為君故、沈吟至今」二句の有無も大きな違いとして指摘できる。

『三国志演義』から毛本と嘉靖本、『文選』から胡刻本、『楽府詩集』所収のものは二首とも、そして別集として『漢魏百三名家集』所収の『魏武帝集』を取り上げて参考までに表にしてみた。第何句かを示す数字は『文選』に付けた数字を他のテキストにも使い、足りない句や前後する句がわかるように並べている。

『演義』 (毛本)	『演義』 (嘉靖本)	『文選』 (胡刻本)	『樂府詩集』 (晋樂所奏)	『樂府詩集』 (本辞)	『百三家集』
1 对酒当歌	1 对酒当歌	1 对酒当歌	1 对酒当歌	1 对酒当歌	1 对酒当歌
2 人生幾何	2 人生幾何	2 人生幾何	2 人生幾何	2 人生幾何	2 人生幾何
3 譬若朝露	3 譬如朝露	3 譬如朝露	3 譬如朝露	3 譬如朝露	3 譬如朝露
4 去日無多	4 去日苦多	4 去日苦多	4 去日苦多	4 去日苦多	4 去日苦多
5 慨当以慷	5 慨当以慷	5 慨当以慷	5 慨当以慷	5 慨当以慷	5 慨当以慷
6 憂思難忘	6 憂思難忘	6 憂思難忘	6 憂思難忘	6 憂思難忘	6 憂思難忘
7 何以解憂	7 何以解憂	7 何以解憂	7 何以解愁	7 何以解憂	7 何以解憂
8 惟有杜康	8 惟有杜康	8 唯有杜康	8 唯有杜康	8 唯有杜康	8 唯有杜康
9 青青子衿	9 青青子襟	9 青青子衿	9 青青子衿	9 青青子衿	9 青青子衿
10 悠悠我心	10 悠悠我心	10 悠悠我心	10 悠悠我心	10 悠悠我心	10 悠悠我心
		11 但為君故	11 但為君故		11 但為君故
		12 沈吟至今	12 沈吟至今		12 沈吟至今
13 呦呦鹿鳴	13 呦呦鹿鳴	13 呦呦鹿鳴		13 呦呦鹿鳴	13 呦呦鹿鳴
14 食野之萍	14 食野之萍	14 食野之萃		14 食野之萃	14 食野之萃
15 我有嘉賓	15 我有嘉賓	15 我有嘉賓		15 我有嘉賓	15 我有嘉賓
16 鼓瑟吹笙	16 鼓瑟吹笙	16 鼓瑟吹笙		16 鼓瑟吹笙	16 鼓瑟吹笙
17 皎皎如月	17 皎皎如月	17 明明如月	17 明明如月	17 明明如月	17 明明如月
18 何時可輟	18 何時可輟	18 何時可掇	18 何時可輟	18 何時可輟	18 何時可掇
19 憂從中來	19 憂從中來	19 憂從中來	19 憂從中來	19 憂從中來	19 憂從中來
20 不可斷絕	20 不可斷絕	20 不可斷絕	20 不可斷絕	20 不可斷絕	20 不可斷絕
			13 呦呦鹿鳴		
			14 食野之萃		
			15 我有嘉賓		
			16 鼓瑟吹笙		
21 越陌度阡	21 越陌度阡	21 越陌度阡		21 越陌度阡	21 越陌度阡
22 枉用相存	22 枉用相存	22 枉用相存		22 枉用相存	22 枉用相存
23 契闊談讌	23 契闊談讌	23 契闊談讌		23 契闊談讌	23 契闊談讌
24 心念旧恩	24 心念旧恩	24 心念旧恩		24 心念旧恩	24 心念旧恩
25 月明星稀	25 月明星稀	25 月明星稀		25 月明星稀	25 月明星稀
26 烏鵲南飛	26 烏鵲南飛	26 烏鵲南飛		26 烏鵲南飛	26 烏鵲南飛
27 繞樹三匝	27 遶樹三匝	27 繞樹三匝		27 繞樹三匝	27 繞樹三匝
28 無枝可依	28 何枝可依	28 何枝可依		28 何枝可依	28 何枝可依
29 山不厭高	29 山不厭高	29 山不厭高	29 山不厭高	29 山不厭高	29 山不厭高
30 水不厭深	30 水不厭深	30 海不厭深	30 水不厭深	30 海不厭深	30 水不厭深
31 周公吐哺	31 周公吐捕	31 周公吐哺	31 周公吐哺	31 周公吐哺	31 周公吐哺
32 天下歸心	32 天下歸心	32 天下歸心	32 天下歸心	32 天下歸心	32 天下歸心

校勘7に引用した『胡氏考異』が言うように「短歌行」は四句で換韻しており、「但為君故、沈吟至今」二句を含めて四句のまとまりが八つあると考えたほうが良く、この二句を欠いて途中で二句だけのまとまりがある構成はバランスが良くないように思える。『樂府詩集』「本辞」もこの二句を欠くが、「晋樂所奏」のほうにはあり、「本辞」を「晋樂所奏」で補うと『文選』に載せるような全32句の作品ができあがる。『樂府詩集』「本辞」は「但為君故、沈吟至今」二句がないのが正しい形なのか、もともとはこの二句があったのが何かの原因で抜け落ちてしまったのかは、わからない^[注12]。

字の異同に目をつぶれば「但為君故、沈吟至今」二句がないという点で『樂府詩集』に「本辞」として収録される「短歌行」が『三国志演義』に引かれる歌に近いと思われる^[注13]。またもし六臣注本の注記に言うように李善注本『文選』にこの二句を欠くテキストがあったならば、それも『三国志演義』に引かれる歌に近いと言っても良さそうである。

以上、曹操「短歌行」について『三国志演義』の三首のテキストや総集等に採録されている「短歌行」との異同を調べ、気のついた点をまとめてみた。非常に粗いまとめであり、ほかにも調べるべきテキストがあると思われるが、今回調べたテキストにおいては、という限定付きでとりあえずの結論を出してみた。

注

- (1) 「後人有詩曰…」 「後人有詩讚之曰…」 「後人有詩歎曰…」 など。
- (2) 嘉靖本はより正確には張尚徳本と記載すべきであろうと思われるが、本稿では二十巻系統のテキストは扱わないので嘉靖本との記載にとどめる。
- (3) 『『三国志演義』版本の研究』(汲古書院、1998年) 第2章「二十四巻系諸本の相互関係」附節「毛宗崗本「凡例」訳注」(初出の論文は1989年)、129頁、132頁を参照した。
- (4) 『三国志演義の世界(増補版)』(東方書店[東方選書]、2010年、初版は1993年) 第三章「『三国志』から『三国志演義』へ」 第三節「明清時代『三国志演義』の成立」、127頁。
- (5) 『『完訳 三国志』第一冊解説』(岩波書店[岩波文庫] 1988年改版、初版は1953年) 329頁。
- (6) 中川氏前掲書(注3) 第2章「二十四巻系諸本の相互関係」 第三節「毛宗崗本の成立過程」(初出の論文は1989年)、120頁～121頁。なお氏にはその後「『李卓吾先生批評三国志』について」(『三国志研究』第11号、三国志学会、2016年) がある。
- (7) 修訂本の『宋書』(中華書局[点校本二十四史修訂本]、2019年) では「輟」に作り、校勘記には異同が示されていない。
- (8) ただし、『統校注 唐詩解釈辞典〔付〕 歴代詩』(松浦友久編、大修館書店、2001年) の曹操「短歌行」を担当された植木久行氏は、語釈で「輟」に言及し「ちなみに掇の異文「輟」は「とどム」と読み、停止させる意。従って一句は、月の運行を止めることができないことをいう。」という。793頁。
- (9) 『管子』形勢解「海不辭水、故能成其大。山不辭土石、故能成其高。明主不厭人、故能成其衆。(海は水を辞せず、故に能く其の大を成す。山は土を辞せず、故に能く其の高きを成す。明主は人を厭わず、故に能く其の衆を成す。)」(※「衆」字、黎翔鳳撰『管子校注』[中華書局[新編諸子集成]、2004年]は「聖」に作る。『二十二子』所収『管子』、『四部叢刊』所収『管子』は「衆」に作る。)

- (10) 『文選』の各種訳注を中心に参照し一応の訳を試みた。二句ごとに訳を示している。『三国志演義』の日本語訳では小川環樹・金田純一郎訳(岩波文庫)は『演義』の字句のままに読み方を示されているが、立間祥介訳(徳間文庫)と井波律子訳(ちくま文庫)は字句を変えている。また鄭鉄生著『三国演義詩詞鑑賞』(新華出版社、2013年)、王永華編著『三国演義詩詞賞析』(安徽人民出版社[中国古典四大名著詩詞賞析]、2015年)にも本詩が取り上げてあり、「何時可輟」の「輟」はそのままであるもの、「去日無多」の「無多」は「苦多」に変えられ、また後述の「但為君故、沈吟至今」の二句も入れられている。
- (11) 矢田博士氏の「曹操「短歌行(対酒篇)」考一歌われなかった「月明星稀」以下四句を中心に一」(『中国詩文論叢』第十三集、中国詩文研究会、1994年)参照。
- (12) 矢田氏前掲(注11)論文も二句のないことが指摘されている。11頁注5。
- (13) この二句、底本では欠くが、同じ毛本でも二句を欠かないものがある。いま手元にあるものを挙げると、『三国演義』(人民文学出版社、1973年第3版、初版は1953年)、『三国演義(校理本)』(沈伯俊校理、江蘇古籍出版社、1994年)、『毛宗崗批評本三国演義』(岳麓書社、2006年)、『沈伯俊評校三国演義』(沈伯俊評校、東方出版中心、2018年)がそうである。それぞれ底本にしたテキストに二句があったのか、二句はなくて校訂整理の際に補ったのか不明である。ほかに『三国演義』(上海古籍出版社、1989年)も二句があるが〔 〕で括られており校訂整理の際に補ったことが示されている。
- 『三国志演義』が物語の展開上で「但為君故、沈吟至今」二句を不要と判断して二句を外した可能性も考えてみたが、とくに「但為君故、沈吟至今」(ただあなたのために、深く考え続けて今に至る)を外す理由はないように思われた。『三国志演義』本文を挙げて確認すべきところではあるが、紙幅の都合で本文の引用は割愛する。

[附記] 本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)「『文選』の規範化に関する基礎的研究」(研究課題番号:19H01237)による研究成果の一部である。